

NEWS LETTER NEWS L

2023.3 第108号



公益財団法人

麻薬・覚せい剤乱用防止センター Drug Abuse Prevention Center



NEWS LETTER

2023.3・第 108号 O N T E N T S

| 随 | 相 |
|---|-------|
| | 1,100 |

C

| ●国連支援募金30周年に想う (公財)麻薬・覚せい剤乱用防止センター 理事長 藤野 彰 | 1 |
|---|----|
| かいせつ ■ UNODCのWorld Drug Report 2022にみる世界の薬物問題の現状と課題(その1) | 2 |
| 誌上研修「薬物乱用防止指導者のための実践講座」 ● 薬物乱用防止教室 (高校編) ライオンズクラブ国際協会 336C地区 佐藤 泰弘 ··································· | 6 |
| ●「ダメ。ゼッタイ。」国連支援募金30周年記念サイド・イベントの開催について … | 12 |
| ● 2022年度「ダメ。ゼッタイ。」国連支援募金状況 | 14 |
| 大麻規制のあり方に関する大麻規制検討小委員会 議論のとりまとめ(案) … | 15 |
| •センターだより | 25 |
| ●ご寄付団体及び賛助会員 | 28 |

国連支援募金30周年に想

(公財)麻薬・ 理事長

覚せ

い

剤乱用防止センター

藤 野

彰

募金活動が行われてきました。 センターが中心となり「ダメ。ゼッタイ。」国連支援 を得て。その両輪の一つとして、一九九三年より当 した。わけても、各地のライオンズクラブのご協力 民一体での薬物乱用防止活動が全国に展開してきま そして「愛する自分を大切に」との標語が生まれ、官 との意思を表明しました。一九七二年のことです。 そして我が国では、薬物乱用は「ダメ。ゼッタイ。」 今から半世紀前に国際社会は条約を改正してま 薬物乱用を防止することがまず最も重要である

発途上国で進む、七七五の薬物乱用防止プロジェク トに役立てられました。 NODC)を通して、これまで延べ六四四カ国の開 集まった募金は、国際連合薬物・犯罪事務所(U

年後の日本からの薬物乱用防止アピール、と題して。 めの提言を行うことになります。 乱用防止活動の原点に立ち戻って、 ´「ダメ。ゼッタイ。」 〜愛する自分を大切に〜三○ 会の場で、日本は〝サイド・イベント〟を開催します。 そこでは、この三○年間の軌跡を振り返り、 それを記念し、今年三月に行われる国連麻薬委員 この国連支援募金は、今年三〇周年を迎えます。 未来へ向かうた 薬物

が条約を改正して示した意思を思い起こします。 あらゆる措置をとるべきだと、半世紀前に国際社会 教育、アフターケア、更生そして社会復帰に至るまで、 にして乱用に陥った人たちの早期発見から、 乱用防止にまず最大の力を注ぐことに加え、 不幸

物乱用防止が最優先であることを再確認し、共に手 日本での取り組みの進化を紹介しながら、まず薬

> への提言が聞けるはずです。 の数々、直面した問題とそれへの対処、さらに未来 定されています。支援募金を受領して展開した活動 特に若者の考えも反映したプレゼンテーションが予 ルー、ラオス、で活動する団体からの出席を求め、 を受領した国々のうち、トルコ、モンテネグロ、ペ を少しでも減らす、さらなる手立てを探るためです。 を携えて歩もうと呼びかけます。世界から薬物乱用 この度、UNODCの協力を得て、国連支援募金

想ができたのだと後に聞かされました。 出会いがきっかけのひとつとなり、国連支援募金構 故阿部俊三氏(当財団元専務理事/企画部長)と私の でした。創立にかかわった人びとのうち、わけても 乱用防止センターを設立する動きが進んでいたとき て私が初めて日本へ出張したのは、麻薬・覚せい剤 思い起こせば、一九八〇年代半ば、国連職員とし

物乱用は「ダメ。ゼッタイ。」であり、「愛する自分を を対象にする標語が創られたのでした。それが、薬 のように、、薬物に手を染めていない、大多数の人々 たちへ向けてのものばかりでした。そこで、ご存じ た標語は、不幸にして薬物乱用を始めてしまった人 大切に」だったのです。 かつて、我が国においても、薬物乱用防止に向け

こもった親子の会話のように、と創始者たちが考え は」と言い、子どもがそれに応えるといった愛情の た記録が残っています。 お母さんが子どもに、「ダメよ。そんなことをして

に対しては、改正された条約が規定する、早期発見 さらにその上で、不幸にして乱用に陥った人びと

> のは、次のようなことでした。 でいかなければならないときだと。 パズルの一片を埋めるようにして、手を携えて進ん が、いわば有機的につながり合い、各自があたかも う書きました。異なった役割を担うそれぞれの組織 とつの組織だけで、 必要があります。それは、ひとつの分野のみで、 治療から社会復帰に至るまで、あらゆる措置をとる 我々は岐路に立っています、と私はかつてこ 完結するものではないのです。 常に語っていた

それは全力で押しとどめなければならないのだと。 がいた)。違法なことをした、とただ咎めたところで、 しかし、ほかの人間がその沼に入ろうとするとき ている人の命を救わなければならないではないか。 全く意味はない。まずなにより先に、目の前で溺れ 止)。そこで溺れている人を見つけたとする(乱用者 泳ぐことが禁止されている沼がある(薬物乱用禁

のためです。 たその条項が「濫用に対する措置」と代わったのはそ こにあります。「中毒者に対する措置」と題されてい だと、条約を改正してその意思を表明した理由がこ はなく、まず乱用の〝防止〟に最大の力を注ぐべき 国際社会が半世紀前、、治療、から考え始めるので

この後は、サイド・イベントの映像記録もご紹介し 解しつつ、このサイド・イベントで、最終的に目指す 復帰に至るまでの、長く複雑なプロセスで、あらゆる 行に移すべく、活動を展開していきます。 つつ、読者諸賢と共に、さらなる未来への提言を宝 かけをし、未来へ向けての具体的な提言を行います。 べきは乱用の防止であることを改めて思い起こし、特 有の事情があって、現在に至ります。我々はそれを理 措置を取らねばなりません。世界各国にはそれぞれ固 に若者たちを巻き込んで、共に歩んでいくための呼び 我々は皆、同じ方向を向いて進んでいるはずです。 もちろんその上で、前述の通り、早期発見から社会

にみる世界の薬物問題の現状と課題(その1)

関連薬物犯罪事務所(United Nations Office on El連薬物犯罪事務所(United Nations Office on Elexand Crime: UNODC)は、世界各国から薬物に関する情報を集め、毎年World Drug Reportとして公表しています。World Drug Report 2022の5つの整物問題に関する信頼できる情報が示されています。本稿ではWorld Drug Report 2022の5つのBooklet つうちBooklet 2の「世界における薬物の需要と供給の概要、Global Overview of Drug Demand and Drug Supply、」に報告されている世界の薬物需要に関する最新の状況と解決すべき深刻なの薬物需要に関する最新の状況と解決すべき深刻なの薬物需要に関する最新の状況と解決すべき深刻なの薬物需要に関する最新の状況と解決すべき深刻なの薬物需要に関する最新の状況と解決すべき深刻ない。

Ⅲ 薬物使用 を掲載します。 Ⅲ 薬物使用、Ⅲ 薬物使用のもたらす健康被害、 № 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)パンデ ※物使用、Ⅲ 薬物使用のもたらす健康被害、 の1)として、Ⅰ UNODCの基本的スタンス、 の1)として、Ⅰ UNODCの基本的スタンス、

UNODCの基本的スタンス

Ι

World Drug Report 2022のUNODC事務局長Ghada Waly氏による前書きは、「Drugs can kill.」で供を超えて家族、友人や同僚を傷つける波及効果をもたらす潜在的な可能性があること、薬物の使用は身体と精神の健康を危険にさらす可能性があり特に身体と精神の健康を危険にさらす可能性があり特に

ければならない。」というUNODCの精神を掲げて 有されなければならず、 のこれらの共通の脅威及び課題に対する解決策は共 と安定を損なう。我々の共通の目標を達成するため 麻薬取引とそれに伴う腐敗や違法な流れは法の支配 に出口をもたらさず、麻薬取引は環境に影響を与え、 薬物の栽培は長期的には貧困にあえぐコミュニティ は皆、子供や愛する人が健康であることを望んでお た理解が忘れられることがあまりにも多い。私たち であるという事実に根ざしたこの基本的で共有され に関する議論では、非医療目的での薬物使用が有害 標を共有している。しかし、薬物政策のアプローチ らゆる場所の人々の健康と福祉を守るという同じ目 な開発を妨げること、を挙げ、「国際社会全体が、あ たらす不安定化と社会的・経済的コストは持続可能 やその他の形態の犯罪と結びついていること、薬物 は紛争を煽り、長引かせる可能性があり、薬物がも 近隣や国が安全であることを望んでいる。違法 科学的根拠に基づいていな

的認識を示しているのです。 体に及ぶ深刻なものであるというUNODCの基本体に及ぶ深刻なものであるというUNODCの基本会能が、単に一人の人間だけではなく、人類社会全 います。

薬物使用

П

世界の薬物使用の状況(全体)

1

①世界の薬物使用は依然高い状態が続いている

勝野眞吾

2億8、400万人(その大半は男性)が過去12か月2億8、400万人(その大半は男性)が過去12か月以内に薬物を使用していました。これは、その年齢局の約18人に1人、5・6%に相当し、薬物を使用した推定人数が2億2、600万人で薬物経験率が5%であった2010年から26%の増加を表すものです。

アヘン系麻薬の使用はほぼ一定であり、MDMA・麻と覚せい剤類使用は2020年に増加した。一方、②世界で最も使用されている薬物は大麻であり、大



かいせつ

UNODCのWorld Drug Report 2022

向を変えました(減少した) スタシータイプの薬物に見られたこれまでの増加 また、COVID-19パンデミックは、 者は2億900万人と推定されています。 界で最も多く使用されている薬物であり、 ミック中に変化(減少)した:2020年、 は、ほとんどの報告国で変化がみられませんでした。 全体的に増加しました。 人でした。 100万人、覚せい剤類3、400万人、 エクスタシーとコカインの傾向はCovid-19パンデ 一要薬 0万人、 物 2020年に大麻と覚せい剤類の使用は 0) 推定使用者数は、 MDMA・エクスタシー2、000 一方、 アヘン系麻薬の使用 アヘン系 コカインとエク コカイン2、 その他の 大麻使用 大麻は世 麻薬6

図2 世界の薬物別薬物使用経験率(過去1年間) 2020あるいは最新データ ·UNODC収集データよりー % 6 5 4 3 2 1 0 エクスタシー 大麻 覚せい剤類 コカイン

図3 大麻と薬物の地域・性別使用割合 大麻の地域・性別使用割合 西&中央 アフリカ ーストラリア ュージーランド 北アメリカ 薬物の性別使用割合 アヘン系 麻薬 医療用鎮静剤 トランキライ ザーの非医療 使用 コカイン NPS 医療用覚せい剤 医療用アヘン系 エクスタシ 賞せい剤 薬物の非医療

2. 世界の薬物使用の状況(性)

大きくみられますが(男性>女性)、覚せい剤および $\begin{array}{c} M \\ D \\ M \\ A \end{array}$ 使用者は特に若年男性に多く見られます。 差は世界のすべての地域でみられます。 あります。大麻に関しては、その使用にみられる性 の薬物において使用者は男性が女性より多い 女性より多く、 ①大麻を含むすべての薬物において使用者は男性が コカイン、 ・エクスタシーなどの薬物使用には性差が 特に、男性の若年層が多い 大麻、 新規精神活性物質 また、 N P S アヘン系 : すべて 、傾向が 大麻

育児、 の増加が速く、 る可能性があります。 ジェンダーに基づく暴力に苦しむ経験率が2~5倍 ②女性は、 使用に関しては、 も薬物への渇望と再発のリスクが高いと言われてい ります。 高いことが認められています。 物を使用する女性は、 ランキライザー) 差別など、より深刻な脆弱性に直面しています。 して様々な脆弱性を持つ:薬物を使用する女性 療用薬物(覚せい剤、 治療へのアクセスに関する障壁が高い傾向があ 性固有の脆弱性に直面しています。 子育て全般に関連する追加の脆弱性に直面す 囚人、 特定のグループの女性、 薬物関連の治療を受ける女性は、 薬物使用者が少ないが、男性より薬物に 覚せい剤および医療用医薬品の非医療的 少数民族のメンバーは、 薬物使用障害への進行の可能性が高 併存疾患を持つ者、 の非医療的使用では性差は小さく 女性はその40%以上を占めます。 女性は男性よりも薬物使用量 薬物を使用しない女性よりも アヘン系薬物、 また、妊娠、 例えば、 セックスワー ひどい偏見 例えば、 トラウマや 男性より 授乳

世界の薬物使用の状況(年齢)

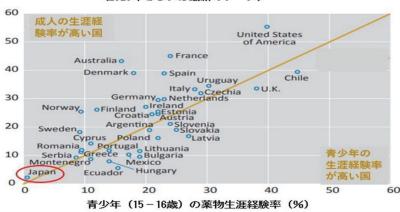
3

ストラリア、デンマーク、 特に日本は、 国によって異なる:青少年および全年齢集団の薬物経 べて薬物経験率が著しく低いのが特徴です。 率が低いのは、 いのは、米国、 験率(これまで一度でも薬物使用をした者の割合)が高 ~64歳)の薬物生涯経験率と比例するが、 経験率は、全体としてそれぞれの国の全年齢集団(15 ①世界の各国において、青少年(15~16歳)の薬物生涯 人の薬物経験率が高い国は、米国、フランス、 青少年の薬物経験率が高い国には、 青少年および全人口集団ともに他国に比 日本、 チリ、英国などです。 セルビア、モンテネグロであり、 スペインなど欧米諸国であ 一方、 チリ、 その割合は 相対的に 薬物経験 オー

図4

青少年(15-16歳)と全年齢集団(15-64歳)の薬物使用の関係

(2020年あるいは最新のデータ)



日本の部分のマークは筆者

全 年 齢集団の薬物生涯経験

冰

間の大麻使用経験率(年経験率)が高い 生産年齢(15~61歳)である全人口集団よりも過去1年 ②大麻に関してみると、青少年(15~17歳) そして日本は青少年の薬物経験率の低い国です。 ラトビア、エクアドルなどがあります。 ウェイなどの北欧諸国、 青少年期は極めて重要なリスクを抱える時 セルビア、 : 薬物使用開始 スウェーデン、 ルーマニア、)の集団

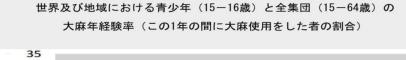
に関

して、

図5

発達過程に及ぼす身体健康上のあるいは精神・心理上 レベルの有害な影響を与えます。そのひとつは発育・

青少年期には、大麻を含む薬物使用が様々な



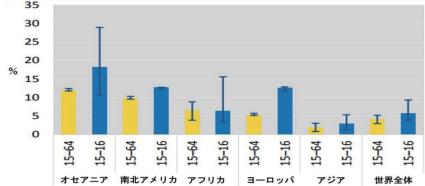
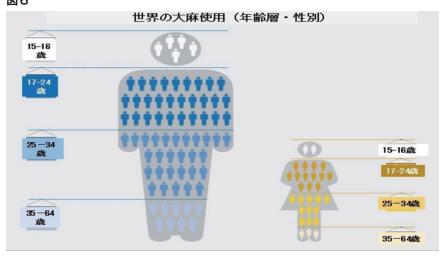


図6



高齢化するにつれて、 少年よりも薬物使用経験率が高くなっています。 てから様々な深刻な問題に遭遇するリスクを高めま やすく、 行動などの他 また、青年期の薬物使用は、 一涯経験率の増加が起こると予測されます。 悪影響であり、他のひとつは教育達成度の低下です。 い国では、 多くの国では、 青少年は成人よりも薬物依存が急速に進行し 加えて青少年期の薬物使用は、 現在青年期にある年齢集団 のリスク行動の増加と関連しています。 今の世代の青少年は、 般成人集団の間で薬物使用 しばしば暴力や危険な性 成人期に至 $\widehat{\exists}$ 前世代の青 ホ j ŀ が

4 世界の薬物使用の状況(複数薬物使用)

く

T S 組み合わせが多い。 が異なる:アメリカでは大麻と覚せい剤系薬物(A ②複数の薬物使用は、 ①薬物使用は、 系薬物、 ・トランキライ 複数薬物の使用によって危険度が増す。 r V コカイン)、 剤 オセアニアでは、 系薬物、 複数の薬物使用に移行する傾向 ゖ゙ アジアではアヘン系薬物と鎮 日日 国や地域によって組み合わ ロッパではアヘン系薬物と ア 大麻と覚せい剤系薬物 フリカでは大麻とアヘン が 強

剤 覚

せ



おわりに

World Drug Report 2022には、薬物使用に関する で、最も信頼できる情報ソースです。 世界の現状がまとめられています。UNODCは、 で、日本部を置くので欧州及びその関連国の科 で、日本部を置くので欧州及びその関連国の科 世界の現状がまとめられています。UNODCは、 世界の現状がまとめられています。

く低く、世界で最も薬物使用・薬物汚染が少ない国び全人口集団ともに他国に比べて薬物経験率が著します。図4に明らかなように、日本は、青少年およ世界的視野からみると、我が国の状況も見えてき

のひとつと言えます。一方、深刻な薬物問題を抱える米国では全年齢集団(15~44歳)でみると、そのる米国では全年齢集団(15~44歳)でみると、その経験率はその中間に位置していますが、その経験物経験率はその中間に位置していますが、その経験をは我が国に比べて高いものです。このように、「薬物乱用は世界に広がっており、我が国を一歩出ると、おいと思います。

現れる青少年期に最も高い頻度でみられます。また、す。特に、大麻使用は薬物使用の影響が深刻な形で大麻は、世界で最も使用・乱用されている薬物で

味を改めて見直すことが必要です。 味を改めて見直すことが必要です。 味を改めて見直すことが必要です。 味を改めて見直すことが必要です。 味を改めて見直すことが必要です。 味を改めて見直すことが必要です。 味を改めて見直すことが必要です。 味を改めて見直すことが必要です。 味を改めて見直すことが必要です。 大麻健用経験率の高い国は、より危険な違法薬物の 大麻を改めて見直すことが必要です。

連のレポートの全訳は参考文献2に示してあります。 なお、World Drug Report 2022 Booklet 3の大麻関

をさして使われることが多くあります。本稿では、useという用語が、日本で通常用いられる「薬物乱用」(注2)世界的には、Drug useあるいはSubstance(注2)世界的には、Drug Reportの非営利目的の要約・翻訳を許しています。図表は原典を活か的の要約・翻訳を許しています。図表は原典を活か

参考文献

読みかえても大きな問題はありません。

Drug useを「薬物使用」としましたが、「薬物乱用」と

--World Drug Report 2022: Booklet 1; Executive Summary Policy Implications, Booklet 2; Global Overview of Drug Demand and Drug Supply, Booklet 3; Drug Market Trends of Cannabis and Opioids, Booklet 4; Drug Market Trends of Cocaine, Amphetamine-type Stimulants and Psychoactive Substances, Booklet 5; Drugs and Environment, UNODC 2022

2JYHL参考資料2020 https://www.jyhl